

応用生態工学研究会ニュースレター N o . 7

Ecology and Civil Engineering Society (E C E S)

1999年6月21日(月)発行

[発行所] 応用生態工学研究会事務局:〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル 226号室

TEL.03-5216-8401 FAX.03-5216-8520 E-mail: see@blue.ocn.ne.jp

[発行者] 応用生態工学研究会(編集責任者:幹事長 谷田一三、事務局代表 熊野可文)

第6号 目次

はじめに

1. 第8回幹事会・第7回理事会報告
2. 札幌基礎講座「多様性と保全の生態学」開催案内(再)
3. 第3回総会・研究発表会開催案内
4. 奨励研究募集
5. 「豊岡コウノトリ生息環境研究プロジェクト」研究活動のお知らせ(大阪実行委員会)
6. いろいろなニュース
- 新著紹介
 - ・「公共事業は果たして悪か一社会資本整備を問うー人文・社会学の発想から」社会資本を考える研究会編
 - ・「溪流生態砂防学」太田猛彦・高橋剛一郎編著、
 - ・「明日の沿岸環境を築くー環境アセスメントへの新提言」日本海洋学会編
 - ・「ヒトとサルの社会史」三戸幸久・渡邊邦夫著
 - ・「水環境と生態系の復元ー河川・湖沼・湿地の保全技術と戦略ー」NRC著、天野邦彦ほか共訳
 - ・「よみがえれアサザ咲く水辺～霞ヶ浦からの挑戦」鶴谷いづみ・飯島博編著
7. 事務局報告

はじめに

99年度に入り、基礎講座や研究発表会など会員参加の場が続きます。ぜひ御参加を!

1. 6月26日~28日琵琶湖
「ヨシ原に関する国際ワークショップおよび公開講演会」(共催)
2. 7月17日~19日札幌基礎講座(P3参照)
「多様性と保全の生態学」
3. 9月18日~20日第3回総会・研究発表会参加受付開始!(P4参照)
4. 奨励研究募集開始!(P5参照)
7月31日までに事務局まで申込み下さい。

1. 第8回幹事会・第7回理事会報告

1999年度当初にあたり、昨年来検討を続けている5ヶ年計画、そして98年度総会並びに99年度活動方針について、審議を行いました。また、97年度発足総会で選出された現役員は、その任期(2年間)を今年9月予定している第3回総会で終えることから、役員改選に対する基本方針の審議が行われました。以下その要旨を報告します。

【第8回幹事会】

開催日時: 1999年5月25日(火) 17:00~20:30

会場: 応用生態工学研究会事務局

出席者: 谷田、辻本、江崎、中村(事務局、熊野)

【第7回理事会】

開催日時: 1999年6月3日(木) 14:00~17:00

会場: 中央大学駿河台記念館220号室

出席者: 川那部、大島、廣瀬、小野、小倉、須賀、山岸、谷田(事務局、熊野)

1) 5ヶ年計画について

(1)委員選任

- ①各委員会は、今後その任期を一期(2年)として、5ヶ年計画の実施を図る。
- ②各委員会の委員を選任し、隨時理事会に報告する。
- ③現時点の委員は別紙の通りである。

「会誌編集委員会」「普及委員会」

「交流委員会」「研究開発委員会」

「大会開催運営委員会」

(2)委員長

各委員会では、委員長を互選で選任し、理事会に報告する。委員長は、担当幹事に限らない。

(3)担当理事について

現在選任されている会誌編集委員会の担当理事は、今後も継続するものとする。他の委員会では、担当理事の選任は行わない。ただし、応用生態工学研究会の役員体制の改正に伴い、必要な場合は改めて検討する。

(4)5ヶ年計画の文案

応用生態工学研究会 5ヶ年計画(案) 1999.6.3

応用生態工学研究会では、1998年10月31日に開催した第2回総会において「応用生態工学研究会活動

指針」を採択した。これは、研究会の発足趣意書及び規約に示された活動方針に基づいて、今後いかに具体的な活動を実施して行くか文書としてまとめたものであり、その中で今後（1999年度以降）5ヶ年の活動指針を示すことが決められた。第2回総会以降、各委員会での検討を重ね、ここに5ヶ年計画

(案) としてまとめたものである。

はじめに

応用生態工学研究会は、「生態学と土木工学の関係者が共同して「人と生物の共存」「生物多様性の保全」「健全な生態系の持続」を共通の目標に、「応用生態工学研究会」を発足させた（発足趣意書）」ものであり、これは社会的要請に基づくものである。ここに示す5ヶ年計画とは、研究会がこの社会的要請に応えるために、研究課題・活動内容・組織体制等に、「応用生態工学」の具体像を創出し、実行するための活動指針・作業手順をまとめたものである。

この5ヶ年計画では、検討を行った各委員会毎にその方針を示す。

[1] 会誌編集委員会

- 1) 会誌編集は、応用生態工学の理論・技術体系を組み立て、明示するものであることから、研究会の最も重要な活動の場と位置づけ、3年目（1999年度）の発刊状況（年2号発行予定）に注目しつつ、会誌の質を確保することを念頭におき、将来の発刊計画を確立して行く。
- 2) 目標としては、季刊誌（年4回発行）とする。

[2] 普及委員会

- 1) 講座及び現地セミナー等については、会員の要望に応じて開催する。
- 2) 各分野の基礎的事項の研修が可能な場（講座）を設ける。
- 3) 複数の分野の専門家によって、共通の課題・問題の相互理解、討議のできる場を設ける。
- 4) 研究実行委員会を各地に設置する（既設組織：東京、名古屋、大阪、札幌）。今後3年以内に、九州北部、仙台、中国、四国、北陸、甲信越などに設置して、研究会活動の中核とする。
- 5) 講座・現地セミナー等の開催費用は、独立採算を継続・確立する。

[3] 交流委員会

- 1) (1)学術交流、(2)研究者・技術者・行政者の交流、(3)市民との交流、(4)国際的な交流、を進める。
- 2) 異分野交流を図るため、ミニシンポジウム等を開催し、問題意識、研究姿勢などの共通性を

確立する。

3) 国際交流については、海外の先進事例見学や海外で開催される関連学会への自主的参加及び派遣（研究会が一部補助）をはじめとして、近隣諸国との研究・実務交流などの交流活動の展開を図る。

[4] 研究開発委員会

- 1) 自主的研究事業や受託事業については、当面は、研究会費による奨励研究を中心にする。奨励研究の採択は、1件30万円程度とし、年間3件程度とする。具体的には、1999年度から実施し、同年9月までに採択を決定、ニュースレターに掲載する。
- 2) 採択奨励研究の義務は、応用生態工学研究会の大会（研究発表会）での口頭もしくはポスター発表を考える。
- 3) 受託研究については、奨励研究の採択内容及び外部からの要請をかんがみ、機が熟せば実施を検討する。
- 4) 受託研究については、自主的であると共に、会員の公平性と対外的な公開性を基本原則とする。受託事業を受けるか否かについては、一定のルール化が必要と考えられ、奨励研究を進めると並行して検討する。

5) 研究開発委員会のメンバーについては、当面奨励研究の推進が中心となることから、幹事及びコンサルタントのメンバーによって構成する。ただし、外部からの受託要請、および機が熟したと考えられるテーマが認められた場合、行政及びその他関連機関からオブザーバーとして委員会への参加を依頼する。

[5] 大会開催運営委員会

- 1) 1999年度は、1998年度実施した総会・研究発表と概ね同様の構成で実施する。
- 2) 5年以内には、社会的に注目を集める話題についても、研究会としてのシンポジウムが開催できるような運営を目指す。
- 3) 研究討論だけでなく、事業への提言や発信ができる集会（シンポ、公開討論会など）ができる大会を目指す。

[6] その他

- 1) 5年以内には日本学術会議登録団体に申請する。
- 2) 研究会活動の各場面で、広報活動を行う。
- 3) 各委員会相互の連携を図る。

2) 99年度事業計画案

1) 会誌

2巻1号(5月末原稿完成、6月初め刊行発送)、2号(10月末発行予定)の発行

2) ニュースレター

No.7 (1999. 6.21予定)

No.8 (1999. 8. 1予定)

No.9 (1999.11.10予定)

No.10 (2000. 2.10予定)

3) 講座・現地セミナー等の開催

(1)札幌基礎講座『多様性と保全の生態学』7/17～19、北海道大学学術交流会館、

講師：鷺谷（主任）、橘川、谷田、中村

(2)『霞ヶ浦現地見学』9/19～20

(3)『多自然型川づくりミニシンポ（仮称）』
(交流委員会担当)

「実務者のための多自然型川づくり基礎講座」
の案が出ていたが、現状での多自然型川づくりは、必ずしも確立されていないし、何らかのマニュアルを普及することがむしろ問題を起こしているし、あるいは将来も起こす可能性につながるので、多自然型川づくりをトピックスにして、異分野から討論できるミニシンポの開催を企画する。

(4)『水理水質基礎講座（仮称）』福岡（辻本、楠田担当）詳細未定

4) 第3回総会・研究発表会

1999年9月18日（土）～19日（日）（連続して、20日（月）霞ヶ浦現地見学）

会場：科学技術館サイエンスホール

懇親会会場：同館レストラン・グリーンハウス

【第3回研究発表会内容】

(1)特別講演

【テーマ】生態学から見た工学（土木工学）
への期待

(2)一般講演募集

ニュースレター等で一般公募する。

(3)霞ヶ浦ミニシンポ

5) 奨励研究

研究開発委員会の提案による奨励研究を今年度から始める。

6) 国際交流

1999年度、海外で関連学会等が開催され、機会があれば、その参加と研究会への報告を条件に約1名の派遣を検討する。派遣にあたっては、研究会より航空費実費程度を支給する。

3) 1998年度決算及び1999年度予算

事務局から報告された、98年度決算および99年度

予算の概算値は基本的に了承する。但し、5ヶ年計画に伴う、各委員会の開催費や奨励研究予算については、当面2ヶ年を目標に特別予算化するものとする。

事務局では、98年度決算及び99年度予算については、確定値を算定して9月総会に報告出来るよう準備する。

4) 役員人事について

第3回総会は、役員任期（2年間）となるため、理事・幹事・監事については、「役員候補選考委員会」を副会長などにより編成して、総会に提案すべく検討調整する。

このなかで、会誌編集委員長については、幹事として位置づけられるようとする。

第3回総会直前に理事会（第8回）を開催して総会への提案方法等を審議する。

5) 名誉会員について

名誉会員を選出することができるよう、規約の改正を第3回総会に提案する。

この名誉会員の選出は、2000年以降の総会で行なう。

6) 事務局体制について

現在規約細則（第5条）に定められている事務局代表については、この細則を改め、「事務局長」と名称変更するとともに、新たに事務局長を補佐する「事務局次長」を設置できるようにした。

2. 札幌基礎講座「多様性と保全の生態学」開催案内（再）

ニュースレターNo.6（1999年3月30日付け）で御案内しましたが、再度御案内します。なお、詳細は当研究会が発行しております案内書をご覧下さい。

名称：札幌基礎講座『多様性と保全の生態学』

開催日：1999年7月17日（土）～19日（月）

会場：北海道大学学術交流会館

講師：鷺谷いづみ（筑波大学）[本講座主任]

橘川次郎（クイーンズランド大学名誉教授）

谷田一三（大阪府立大学）

中村太士（北海道大学）

受講料：正会員・賛助会員／6,000円、学生（会員・非会員）／3,000円、非会員／8,000円

懇親会費：5,000円（7月17日札幌アスペンホテル）

現地見学：7月19日希望者交通費実費負担で実施

（参加希望者は、申込み用紙に受講・懇親会参加・現地見学参加の有無、氏名・所属・連絡先等を記し、FAX、E-mail等で事務局まで申込み下さい。）

3. 第3回総会・研究発表会開催案内

1998年10月31日・11月1日の第2回総会・研究発表会から、早くも1年。第1期(2年間)も終わり、第3回総会・研究発表会を開催する時期を迎えます。今回の第3回総会においては、役員の改選も行います。

総会に合わせて開催する研究発表会への講演の募集受付を始めます。研究発表会は、研究成果と共に、現場で抱えている課題や問題提起、プロジェクト提案そして自由な発言の場です。会員の皆様の参加をお待ちしております。

そして、総会・研究会への参加と共に、翌日の9月20日(月)には、霞ヶ浦の現地見学を行いますので、これらの参加申し込みの受付も開始します。

- 第3回総会 : 1999年9月18日(土)
13:30~14:30
- 第3回研究発表会 : 1999年9月18日(土)
15:00~9月19日(日)16:30まで
【会場】科学技術館サイエンスホール
(18日夕方、懇親会、同館グリーンハウス)
〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園2-1
(地下鉄東西線竹橋駅1b出口徒歩7分)
- 霞ヶ浦現地見学 : 1999年9月20日(月)
8:00(潮来)~15:00頃(JR土浦駅解散)

(1) スケジュール(詳細は後日)

- 9月18日(土)
- 9:00 第9回幹事会(発明会館会議室)
 - 11:00 第8回理事会(発明会館会議室)
 - 13:00 (ホール開場、受付開始)
 - 13:30 第3回総会
 1. 総会議長選出
 2. 議事(会長挨拶、98事業報告、98決算報告、98監査報告、役員改選、規約改正、99事業計画、99年度予算、その他5ヶ年計画)
- 注) 総会は応用生態工学研究会の規約14条により正会員により構成されます。
- 14:30
- 15:00 第3回研究発表会
 1. 開会挨拶
 2. 特別講演
 3. 一般講演
- 17:00 懇親会
- 9月19日(日)
- 9:00 3. 一般講演(つづき)
 - 15:00 4. ミニシンポ『霞ヶ浦の環境復元に向けて(仮称)』

- (1)鷲谷いづみ(筑波大学)
- (2)飯島博(霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議事務局長)
- (3)その他研究者及び実務者等

16:30 (閉会)

(閉会後、霞ヶ浦現地見学参加者は、バスで潮来に直行、宿泊)

9月20日(月)8:00~ 霞ヶ浦現地見学

[潮来一水郷トンボ公園—アサザプロジェクト実施現場—桜川村土捨場—石岡市休耕田ビオトープ(オニバス池)—JR土浦駅解散(15:00頃)]

(2) 一般講演募集

第3回研究発表会では、応用生態工学にかかわる研究報告、研究プロジェクト提案などの一般講演を受付ます。下記要領に基づき応募して下さい。

(1) 講演内容

一般講演に応募できる講演内容は、応用生態工学に関する調査報告、研究報告、事例報告、研究プロジェクト提案、および自由課題。

(2) 講演時間

講演時間は、1課題当たり15分程度(発表12分、討論3分)で、講演申込数により決定。

(3) 講演申込

一般講演を申込みされる方は、A4版用紙1枚、形式自由、ただし下記事項を記入の上、事務局まで郵便、FAX、E-mailで送って下さい。後日事務局より受付の連絡をします。

——講演申込記入事項——(A4版1枚)

- ① 講演者名および連名者名と各自の所属
- ② 講演題目
- ③ 連絡先(〒、住所、氏名、TEL、FAX、E-mail)
- ④ 講演概要(和文200字程度)
- ⑤ キーワード(5つ程度)

(4) 講演要旨原稿の提出

一般講演者には、講演要旨原稿(A4版4枚以内)を8月31日までに事務局へ提出。原稿は下記の要領に従って作成。

——講演要旨原稿作成要領——

- ・A4版縦、4枚以内
- ・左右15mm以上、上下18mm以上余白
- ・横一段組みにて中央に「講演題目」を和文と英文にて、14ポイント程度の文字、2行で記入
- ・題目の下1行空け右寄せで「講演者名、連名者名、各自の所属」を、12ポイント程度の文字で記入
- ・原稿はそのまま印刷できるよう、プリント

および図表等を張り付けたものとそのコピーを1部提出。

(5) 講演者資格

講演者は、応用生態工学研究会の正会員、学生会員、および賛助会員法人に所属する個人。

なお、連名者については会員・非会員を問わない。ただし、講演者が学生の場合、連名者に会員がいれば発表可能です。

(3) 参加料

一般参加者・講演者ともに下記参加料とします。

正会員・賛助会員	: 6,000円
学生会員	: 2,000円
非会員	: 8,000円
学生非会員	: 3,000円
懇親会参加費（会員・非会員同）	: 4,000円

注1) 9月18日総会のみ出席の正会員は、無料。

注2) 当日配布する講演集費用を含む。講演集のみ希望者には、2,000円でお分けします。

(4) 霞ヶ浦現地見学

9月19日（日）第3回研究発表会では、霞ヶ浦をテーマにミニシンポジウムを行い、終了後潮来に向かいます。20日（月）の霞ヶ浦現地見学では、昨年（1998年8月）の『霞ヶ浦現地セミナー』で見学した水郷トンボ公園、およびミニシンポジウムで取り上げる内容と関連深い霞ヶ浦周辺の見学地をバスで回ります。筑波大学の鷺谷幹事及び地元で活躍している飯島博さん等が御案内します。

参加料金は、まだ決まっておりません（計10,000円～15,000円程度、宿泊費、昼食代含む）ので、参加者には後日連絡いたします。

——霞ヶ浦現地見学（予定）——

- ① 9/19（日）サイエンスホール前17:00出発
東京→潮来（チャーターバス予定）、潮来宿泊
(19日夕食、20日朝食付き)
- ② 9/20（月）潮来宿泊ホテル前8:00出発
現地見学（バスチャーター及び昼食付き）
- ③ 同日15:00頃 JR土浦駅で解散。

【受付期限】

1. 第3回研究発表会・一般講演申込受付期限：
1999年7月31日（土）消印有効
2. （同）・一般講演要旨原稿提出期限：
1999年8月31日（火）消印有効
3. 第3回総会・研究発表会参加受付期限：
1999年8月31日（火）消印有効
4. 霞ヶ浦現地見学参加受付期限：
1999年8月31日（火）消印有効

（第3回総会、第3回研究発表会、霞ヶ浦現地見学への参加申込みは、会員番号、氏名、所属、連絡先（〒、住所、TEL、FAX、E-mail）を明記の上、郵

便・FAX・E-mailにて下記事務所へ）

（各々の参加料は、1999年9月10日までに指定口座に振込いただきます）

【申込み及び問い合わせ先】

応用生態工学研究会事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5第7麹町ビル226号室 TEL.03-5216-8401 FAX.03-5216-8520

E-mail : see@blue.ocn.ne.jp

【指定口座】

・郵便振替口座

（口座名義）応用生態工学研究会
(口座番号) 00140-7-404275

・銀行口座

（口座名称）応用生態工学研究会熊野可文
(銀行) あさひ銀行麹町支店
(口座番号) 普通3686728

注) 指定口座に振り込む場合、参加する個人名が分かるようにして下さい。

4. 奨励研究募集

応用生態工学研究会では、5ヶ年計画の検討をしてきましたが、第7回理事会（99.6.3）で、今年度（1999年度）より奨励研究を募集することが決定しました。下記募集要領に従い、事務局まで申込み下さい。

——奨励研究募集要領——

- 1) 課題：応用生態工学に係わる研究・提案
- 2) 対象者：会員（正・学生会員及び賛助会員）の若手研究者・実務者（自ら研究計画を立案しそれを実行できる会員）の個人あるいはグループ。
- 3) 費用：1件30万程度（3件程度、研究会より支給）
- 4) スケジュール：
1999年6月 · ニュースレターNo.7で募集開始
7月31日 · 募集締め切り
[奨励研究申請書] 提出
8月末 · 採択決定（研究開発委員会で審査、理事会で決定）
9月1日～2000年8月31日を研究作業期間とする。
2000年8月31日 · 研究報告概要及び会計報告提出。
2001年4月30日 · 研究報告書提出。後ほど会誌発表できるのが望ましい。
- 5) 奨励研究申請書：書式自由。但し下記事項必ず記入。A4版計2枚程度で提出。
①会員番号、氏名、所属、連絡先（〒、住所、

TEL、FAX、E-mail)。グループの場合、参加者全氏名、所属および代表者名を明示。

- ②予算書(備品、消耗品、旅費などを区別して、研究計画との関連が分かり易いように書く)
- ③研究計画書[A4版1枚程度](研究課題、目的、方法、成果の見通し、応用生態工学への貢献など)

5. 「豊岡コウノトリ生息環境研究プロジェクト」研究会活動のお知らせ

大阪研究実行委員会 古川 整治

(1)ワークショップから豊岡コウノトリ生息環境研究プロジェクトへ

ニュースレターNo.6で報告がありましたように、「ワークショップ／水辺の生物群集と保全」は1998年12月4～5日に江崎保男(姫路工業大学)幹事をオーガナイザーとして大阪で開催されました。このワークショップの運営を分担していた大阪研究実行委員会のメンバー(11名)がワークショップ終了後に集まつたときに、何らかのテーマを設定して今後もこのメンバーで活動を続けてはどうかという話になりました(意欲のあるメンバーが集まっているのにワークショップのみで解散するのは惜しい)。そのときの江崎幹事から豊岡のコウノトリをテーマに選んではという提案があって、それで行こうということになったわけです(実は、大胆にも、そのときメンバーのうち二、三人を除いてコウノトリについて予備知識がないという状態でした)。

(2)豊岡コウノトリの歴史

コウノトリはヨーロッパコウノトリとは別種として扱われています。世界に現在生息するコウノトリは、シベリア、中国東北部を中心に2,000から3,000羽前後で、個体数からみて絶滅が心配される状態です。

19世紀にはコウノトリが日本各地で繁殖していたという記録があるようです。しかし、20世紀には兵庫県北部の但馬地方で生息が知られるのみとなり、1956年には特別天然記念物に指定されましたが、1959年に豊岡市内で1羽のヒナがふ化したのを最後に但馬地方での自然繁殖は途絶えています。1965年からは残った野生個体の捕獲と人工飼育が開始され、1971年に豊岡で傷ついた1羽が捕獲されたのを最後に但馬地方の野生個体群は絶滅しています。絶滅に至る最後の過程では死亡個体から大量の水銀が検出され、農薬による水銀中毒が大きな役割を果たしたと考えられています。

豊岡市に1965年2月に開設された人工飼育場では、24年目の1989年5月に初めてソ連産の一組からヒナのふ化に成功します。その後はほぼ毎年繁殖に成功

しております、1999年1月現在で、6ペア56羽を飼育しています。ちなみに全国15施設でのコウノトリ飼育個体数は122羽です。

1991年頃から野生復帰の声があがりはじめ、1997年には兵庫県が野生化に向けての調査・研究施設としてコウノトリの郷公園の整備に着手しました。郷公園は1999年秋に開園予定で、コウノトリの種の保存と遺伝的管理、野生化に向けての科学的研究および実験的試み、さらには人と自然の共生できる地域環境の創造に向けての普及啓発を基本的機能として施設配置を行っています。

また、豊岡市民グループである「コウノトリ市民研究所」は、1995年から水生生物や植物の調査活動を市民参加型で展開しており、1996年5月には、豊岡市教育委員会生涯学習課・コウノトリの郷公園推進室がニュースレター「コウノトリ野生復帰の現場から—FLY to the WILD」による情報提供を開始し、これが現在も継続されています。

(3)研究会活動のテーマ

豊岡でコウノトリが野生復帰するために最も重要な条件は、コウノトリの生息に必要な餌場と餌量が確保できるかどうかにあると考えています。コウノトリの詳しい繁殖生態は不明な点が多くありませんが、1960年代の但馬地方では、円山川の氾濫原の水田地帯に面した丘陵斜面のマツに営巣していた記録が残されており、巣の前に広がる水田地帯と河川が重要な餌場になっていたと考えられます。このことから、今のところ研究課題を下記のように設定しています。

- ①現在の豊岡盆地六方川周辺の水田地帯、水路および河川におけるコウノトリ餌場のポテンシャル分布の把握：餌になる生物量分布の現地調査
- ②水田環境における水生生物群集の形成機構に関する考察：環境要因と水域ネットワークの影響の分析
- ③コウノトリ野生復帰以後の生息環境改善可能性の検討：現況での餌場ポテンシャル分布と必要餌量を用いた予測

(4)研究会活動の予定等

●活動期間

当面は、1999年と2000年の2カ年を活動期間として進めています。なお、本研究プロジェクトは(財)河川環境管理財団の河川整備基金の助成を得られることになりました。

●現地状況の把握

今までに、コウノトリ市民研究所の人たちの協力を得て、豊岡盆地周辺の現地調査を2回実施しており、調査地点を選定できる程度まで水田地域の水路網や河川域の状況を概略把握しています。さらに、

地形図上の水田・河川・水路網に関する情報をG I Sに取り込む作業を行っています。また、円山川のデータについては、近畿地方建設局豊岡工事事務所から現況河川横断図と日本水位・流量観測資料等を提供してもらいました。

● 野外生物調査

来る6月13日にコウノトリ市民研究所主催で豊岡盆地のメダカ分布調査が行われます。この調査は豊岡市民を対象としたものですが、当研究会も協力して参加し、同時に研究活動の基礎データを得ようという計画で現在準備中です。各調査地点の生物相に加えて、水路の状態、水質・水温等の物理環境などのデータを収集する予定です。

この調査とは別に、餌場のモニタリング参考資料とするため、サギの分布調査を行います。なお、第1回目のサギ調査は、5月30日に行われました。

これらの調査結果については、研究発表会で速報を報告したいと考えています。また、この結果を踏まえて調査方法を再検討し、来年の同時期に再度野外生物調査を実施する予定です。

● G I S 上での分析作業

地形図情報と現地調査結果をG I S上で表示できるようにするのと並行して、種々の関連指標の分布状況を数値的&マップ的に把握する予定で現在作業を進めています。G I Sで得られた数値分布情報に統計分析手法等を利用して、環境要因や水路ネットワークの相対的影响をある程度明らかにできるのではと考えています。

● 当研究会参加メンバーについて

6/13の野外生物調査については参加協力者を口コミで募集し、当日は大阪から17名程度参加する予定です（参加者の専門分野の内訳は、9名が生物学、8名が土木工学です）。本研究会の今後の活動や研究内容に興味のある方は連絡してみて下さい。

6. いろいろなニュース

新著紹介

・「公共事業は果たして悪か一社会資本整備を問うー人文・社会学の発想から」社会資本を考える研究会編、日経B P社、本体1,500円：衝撃的なタイトルがついているが、中身は極めてまさに社会資本の意義が議論されている。自然の生態系も含めて広義の社会資本と考え全体としての「社会資本」がどのように充実される必要があるかの森野美穂さんの指摘、フローではなく長期のストックとしての社会資本を整備するように今後の整備の転換が必要と説く加藤尚武さんの提言など、貴重な視点が紹介されている。この本のもととなったシンポジウムは、

人文社会学の立場のパネリストと主催者の工学関係者から構成されているが、今後は自然環境科学とくに生態学の立場も交えた三位一体のパネルも面白いだろう。[谷田一三]

・「渓流生態砂防学」、太田猛彦・高橋剛一郎編、東京大学出版会、本体3,400円（本体）：東京のさる書店では3段平積みで売られていたので、手にとって見られた方も多いと思う。同じ出版会から刊行された「河川生態環境工学」とよく似た構成で、土木（砂防）工学者と生態学者の連携で作られた好著。しかし、時代が進み、両者の連携はさらに密で科学的になってきたことが読み取れる。また、編者の高橋さんや中村太士さんのように、極めて生態学に近い工学者という境界分野の研究者が着実に増えている。この本は、砂防学会のシンポジウムや連載などとともに、現場での共同研究が土台となったあるが、そのような共同作業が、共通の理解を促進してきたことは、評者も実感している。いずれの章や節も、著者の意見がなかなか良く出ていて興味深いが、著者の名前を見るためには目次へ戻らなければならぬのは、極めて不便。それなりに意見の違ひのあるこのような分野では、著者のクレジットがもつとほつきりと判るような構成にすべきであろう。砂防関連の用語だけでなく、生態関連の用語も多数収載されていて、とりあえず便利である。[谷田一三]

・「明日の沿岸環境を築くー環境アセスメントへの新提言」、日本海洋学会編、恒星者厚生閣、本体3,800円：環境アセスメント法の施行に伴い多くの関連図書が出版されている。この本は、沿岸環境に重点をおいた好著で、百科全書的にも使える。過去の国内の事業アセスメント例では、長良川河口堰、三番瀬埋め立て、中海本庄工区、藤前干潟、諫早湾干拓、メガフロートが取り上げられている。なかでも、長良川、諫早湾の部分は、委員会や調査にたずさわった西條八束さん、東幹夫さんがそれぞれ執筆し、自省も含めた充実した内容となっている。委員として関与することで、情報の核心に触れ、影響力も大きくなるとともに、責任も大きくなる事態は、いわゆる「事業反対派」の学識経験者に突きつけられる両刃の剣、このような状況は今後はますます増えるだろう。諫早湾では、各種の学協会がアセスメントに関わってきた経緯と、各々の学会の態度と評価が、東さんの立場からよく書かれている。今後は、個人だけでなく研究者集団としての学会の立場も問われるが多くなるだろう。新アセスメント法の内容、従来との相違点の紹介も判りやすい。展望編では、情報公開と人材育成といった面にも触れられ、評者も共感する部分が多かった。（海上保安庁・海洋デ

ータセンター) のデータ収集と保存・公開システムも詳しく紹介されている。評者の専門に近い生物資料については、コード化の方法などはやや古くさい印象があるが(近年のコンピューターの発達は数値以外の情報も高速で扱える)、河川情報センターとなるんで、水圏環境についての貴重な公開情報源である。[谷田一三]

・「ヒトとサルの社会史」、三戸幸久、渡邊邦夫著、東海大学出版会、本体3,200円：評者もニホンザル研究を志したことがあり、初任地がニホンザルの野生個体群の研究で有名な石川県白山自然保護センターであっただけに、ニホンザルには今でも思い入れがある。伊谷純一郎さんの古典的名著「高崎山のサル」以来、ニホンザルの生態など生物学に関する本は多いが、ヒトとサルとの関係を社会学的に扱った図書は少ない。本書は、縄文以来の日本人と日本猿との関係を、サルの生物学研究者が社会学的な視点から解き明かした好著。とくに文献資料の増える江戸期以降は、過去のヒトとサルの関係が、飢饉や狩猟といった時代背景も含めて生き生きと描かれている。戦後の野猿公苑ブームとその斜陽化と猿害問題についても詳しく紹介されている。北方系のイワナと南方系のサルが、人口密集地域のすぐそばに共存する世界的には特異な日本列島、北限のサルの保全は、あるいは中国産のトキの保全よりは、世界的に見れば重要な課題かもしれない。[谷田一三]

・「水循環と生態系の復元—河川・湖沼・湿地の保全技術と戦略」National Research Council(米国調査研究評議会)著、浅野孝・大垣眞一郎・渡辺義公監訳、天野邦彦・田中宏明・吉谷純一共訳、技報堂出版、本体10,000円：本著は、米国調査研究評議会が、米国の市民の草の根の環境保全運動に応える形で制定した「国家環境政策法」1969年、「連邦水質汚濁防止法」1972年、「絶滅危惧種保全法」1973年といった法律等によって、連邦政府が強力なリーダーシップをとりながら、水生生態系の復元の努力を行ってきた経験を紹介するとともに、米国この分野の学識者が水生生態系復元の意義と原理を多くのケーススタディをもとに分析・評価した報告書であり、その和訳したものである。目次は以下の通りである。(本書の要旨)(第1章序論)(第2章水生生態系管理の目的と担当機関の変遷)(第3章水生生態系復元のプランニングと評価)(第4章湖沼)(第5章河川)(第6章湿地)(第7章水生生態系の統合的復元)(第8章国家的な水生生態系の復元戦略:その基本要素および関連する勧告)(付録A.復元のケーススタディ)(付録B.用語解説)(コラム)。[熊野可文]

・「よみがえれアサザ咲く水辺～霞ヶ浦からの挑戦」鷺谷いづみ・飯島博編、文一総合出版、本体1,900円：本著は、応用生態工学研究会が昨年(1998年)8月に実施した、「霞ヶ浦現地セミナー」での現地見学や、公開講座の内容をまとめたものである。編者の鷺谷いづみ氏は、当研究会幹事、この現地セミナーの企画実施担当者であり、飯島博氏は霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議事務局長で現地で活動を続けている。目次は以下の通りである。(水郷トンボ公園を訪ねてーほんとうのビオトープ)鷺谷いづみ、(日本の水草の現状とその保全をめぐる課題)角野康郎、(アサザと霞ヶ浦の植生帶の保全生態学)鷺谷いづみ、(霞ヶ浦の環境対策の現状)富田和久、(湖と森と人を結ぶ霞ヶ浦アサザプロジェクト)飯島博、(ジャランボプロジェクト・トークショウ:生きもの工事の楽しさと難しさ)。[熊野可文]

7. 事務局報告

99年度が始まりました。会員の皆様には既に会誌『応用生態工学』2巻1号がお届きかと思います。ニュースレターもNo.7号となり、基礎講座も進み、応用生態工学研究会の活動もそろそろその姿が見え初めて来たような気がします。5ヶ年計画ではさらに具体的な応用生態工学の姿を明らかにするために始動します。会員の皆さんのが参加を期待します。

[1999年6月2日現在会員数]

正(学生)会員 924名
賛助会員 58法人

[研究会活動]

1999. 4. 1 · 1999年度開始
5.15 · 潮来にて地元のメンバーと9月霞ヶ浦現地見学の事前打ち合わせ
5.18 · 札幌研究実行委員会開催(札幌アスペンホテル、札幌基礎講座の準備)
5.25 · 第8回幹事会開催(事務局、5ヶ年計画・99年度事業計画等)
5.31 · 会誌「応用生態工学」2巻1号発行
6. 3 · 第7回理事会開催(中央大学駿河台記念館)
6.21 · ニュースレターNo.7発行